

令和元年度普及活動成果集



京築農業の「明日」を創る！

 福岡県京築普及指導センター

令和2年3月

はじめに

京築地域の農業者並びに関係機関の皆様には、平素より普及指導センターの活動にご理解とご協力をいただき、心より感謝を申し上げます。

近年の異常気象とそれに伴う自然災害の多発は、今年度も例外ではありませんでした。歴代で最も遅い6月26日の梅雨入りや、111年ぶりに記録を更新した2月16日の初雪など、記録尽くしの気象状況であり、京築地域の農業生産にとっても厳しい一年でした。

そのような中、農業者、関係機関の皆様のご協力を頂き、新たな担い手の確保・育成について、新規就農者や新規園芸農家の確保・労力支援による園芸産地振興を図ることができました。

また、土地利用型担い手の育成に加え、県育成キウイフルーツの「甘うい」やケイトウ、夏秋なすなど多くの園芸品目の推進を図るとともに酪農経営の強化に取組み、京築地域の農業振興に資する一定の成果が得られました。

本成果集では、これまでに普及活動で得られた成果をお示しするとともに、管内農業・農村の動きや普及指導員調査研究及び現地実証・展示ほの結果を掲載しておりますので、ご一読のうえ産地振興等の参考にさせていただければと存じます。

普及指導センターは、今後とも農業・農村の振興のため、地域に向き皆様と一緒に考え行動してまいりますので、ご理解とご協力をお願いします。

令和2年3月

京築普及指導センター

センター長 古屋 真紀

目次

はじめに.....表紙裏

1 普及活動の主な成果

新規就農者の確保支援.....	1
水田農業の持続的な担い手の育成.....	2
新規園芸農家の確保と労力支援による産地維持拡大.....	3
いちごの生産安定と担い手強化.....	4
イチジク収穫予測による有利販売と産地強化.....	5
ケイトウの産地拡大とホオズキの安定生産技術の確立.....	6
酪農経営安定に向けて.....	7

2 管内の動き(トピックス)

.....8

3 普及指導員調査研究結果の概要

.....13

4 現地実証・展示ほ結果の概要

.....15

5 各種表彰の紹介(国、県)

.....16

6 参考資料

(1) 令和元年の気象及び農業生産の概要.....	17
(2) 現地活動情報一覧.....	20
(3) 普及指導センターの活動体制.....	22

新規就農者の確保支援

—京築地域に若い活力の導入を—

■課題化の背景

我が国の農業において、農業者の高齢化による担い手の減少が深刻な問題となっています。京築地域も例外ではなく、産地や農村地域の維持・発展をどのように進めるかが課題です。

そこで、次世代の担い手となる新規就農者の確保を目的とした活動に取り組みました。

■活動内容

1 新規就農者の確保

京築地域農業・農村活性化協議会*担い手部会が主催して、JR小倉駅近くのKMビルで「就農・就業相談会 in 北九州」を開催しました。この相談会に向けて、普及指導センターは近隣のハローワーク、農業大学校、農業高校等に出向き、事前に周知を行い、参加者の確保に努めました。

また、同部会が開催した「京築地域新規就農バスツアー」では、普及指導センターは過去の相談会の来場者やJA農業塾の塾生等に積極的な声掛けを行い、参加者を募るとともに京築地域の農家、農業法人や研修施設の現場視察を支援しました。

*京築地域農業・農村活性化協議会は、京築地域の市町、農業協同組合、県関係機関等で構成された協議会で、京築地域の農業・農村の活性化に資することを目的としています。

■主な成果

1 新規就農者の確保

「就農・就業相談会 in 北九州」では20名が相談に訪れ、「京築地域新規就農バスツアー」には21名の参加がありました。その後、就農希望者には就農計画作成等の個別支援を行った結果、今年度は15名が新規に就農しました。



「就農・就業相談会 in 北九州」の様子



「京築地域新規就農バスツアー」の様子

■今後の取組み

相談会やバスツアーの参加者を今後も募り、京築地域での就農希望者を確保し、円滑な農業経営に向けた継続的な支援を行っていきます。

(地域振興課 地域係)

水田農業の持続的な担い手の育成

—集落営農組織の運営や経営の改善—

■課題化の背景

京築地域は、兼業農家主体の水田農業地帯で、水稻は主に個別農家、大豆・飼料用米・WCS・麦類は主に集落営農組織が作付けを担っています。個別農家は高齢化が顕著で、農家数の減少が続いていますが、一方で大規模化する農家も増えています。集落営農組織は、水田の借地依頼の増加に伴い経営面積が拡大し法人化するとともに、水稻の作付けが進んでいます。今後の京築地域の水田農業の担い手として、集落営農組織は重要ですが、既存の集落営農組織では、大豆・麦類等の収量の低迷や、役員・オペレーターの高齢化・なり手不足等で、組織の経営や運営に厳しさが増しており、永続的な担い手として維持・発展してもらうために、組織の経営や運営の改善を支援しました。

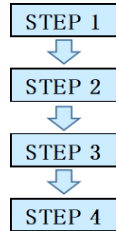
■活動内容

○組織の経営や運営の改善のために、組織内で話し合い、以下2つの計画づくりとその実践の支援を行いました。

○本年は9組織(行橋市:2、みやこ町:2、豊前市:2、築上町:2、上毛町:1)に対し、理事会・役員会や検討会等に参画して、理事・役員・オペレーターとの定期的な協議を実施しました。

1 組織改善計画「将来ビジョン」

組織運営や経営改善のため、組織内で話し合い、組織のヒト・トチ・モノ・カネの現状整理(「資源点検表」の作成)、課題の把握、今後の課題解決に向けた、組織自身による手作りの組織改善計画。



●策定工程

組織の実態把握:「資源点検表」の作成

組織の課題(危機)整理

組織の課題解決(危機回避)計画の作成

「将来ビジョン」の実践

2 適期・適切な作業実践計画

「水稻(主食用米・飼料用米・WCS)・麦類・大豆作業計画」

水稻・麦類・大豆の収量向上に向けた作業を適期・適切に実施するために、主にオペレーター間で話し合い、月毎に各作業の実施日や実施内容を記入する農作業計画。



「農作業計画」作成について協議

■主な成果

1 「将来ビジョン」の策定

8組織(行橋市:2、みやこ町:2、豊前市:1、築上町:2、上毛町:1)で「将来ビジョン」を策定しました。

2 「水稻(主食用米・飼料用米・WCS)・麦類・大豆作業計画」の作成及び実践

9組織で「農作業計画」を作成し、ほぼ計画どおり適期・適切な作業が実践できました。

3 「将来ビジョン」の実践(目標(行動・数値)達成)

○ヒト(役員・オペレーター等人材確保)の目標は、話し合いの中で危機感を共有できたためか、積極的に集落内での人材掘り起こし(オペレーター候補のリストアップ)等の取り組みが行われ、8組織すべてで目標(行動・数値)を達成しました。

○カネ(目標粗収益達成)の目標は、作業計画作成の中でオペレーター間での確認・周知ができ、適期・適切な作業の度合いが高まり、水稻・大豆が不作の中にあっても、5組織で目標(粗収益)を達成しました。

■今後の取組み

今後も、集落営農組織の経営や運営の改善に向け、この取り組みの推進を図っていきます。
(地域振興課 水田農業係)

1 普及活動の主な成果

新規園芸農家の確保と労力支援による産地維持拡大

—関係機関と役割を分担して新規園芸農家を育成—

■課題化の背景

京築地域では生産者の高齢化率が高く、今後、園芸産地の縮小が予想されます。

このため、第二種兼業農家が多いことに着目し、この退職者及び退職予定者を対象に関係機関と連携して園芸作物を推進しました。また、園芸農家の労力確保のため、民間派遣会社や社会福祉法人との連携に取り組みました。

■活動内容

1 新規園芸農家の確保

市町に「園芸作物栽培希望者説明会」の開催を呼びかけ、参加した園芸作物栽培経験者にはJAの生産部会加入を、未経験者にはJA農業塾への参加を勧め、1年間かけて技術や知識の習得を図り、園芸農家を育成しました。

2 労力支援

JAパッケージセンター※1（いちご、夏秋なす、レタス）、VF出荷※2（イチジク、甘うい）、果樹サポート部の利用推進を図るとともに、民間派遣会社および社会福祉法人からの労働者派遣活用を進めました。

※1 出荷調製作業を受託するJA施設

※2 JA全農ふくれんVF課がパックセンターを通して行う出荷販売

■主な成果

1 新規園芸農家の確保

吉富町、みやこ町、行橋市の3市町が「園芸作物栽培希望者説明会」を実施し、栽培希望者を37名集めました。JA農業塾に16名が入塾し、農家は場見学や座学、実習により園芸農家を育成しました。

これらの活動により、令和元年は17名の新規園芸農家を確保しました。



園芸作物栽培希望者説明会

2 労力支援

各種の労力支援の活用者は、76戸に増加しました。うち、民間派遣会社や社会福祉法人活用は5戸に増加しました。

これらの労力支援や新規園芸農家確保により、「甘うい」5.6ha（+50a）、「ケイトウ」2.1ha（+90a）、「夏秋なす」1.6ha（+20a）に作付面積が拡大しました。

		現状 2018	2019	
調製作業 支援	パッケージセンター	夏秋なす	2	7
		いちご	11	12
		レタス	0	2
	VFセンター	甘うい	8	12
		イチジク	30	22
		レタス	0	0
社会福祉法人	川底柿	0	1	
	ケイトウ	0	0	
	果樹サポート部	果樹	16	16
栽培作業 支援	果樹サポート部	いちご	1	0
		レタス	1	3
	民間派遣会社	スイートコーン	0	1
合計		69	76	

■今後の取組み

この取組みを他市町に広げ、市町で園芸作物栽培希望者を募りJA農業塾で育成する体制を確立するとともに、多様な労力支援を活用していくことで、園芸農家を確保していきます。
(園芸畜産課 野菜係)

いちごの生産安定と担い手強化

— 若手の育成で産地力アップ！ —

■課題化の背景

J A福岡京築いちご部会（8.3ha、69戸）は、単価が高い1月～2月にかけて出荷量が不安定でした。要因として、クラウン径の小さい苗が多いことと定植後の栽培管理が不十分と考えられました。そこで、クラウン径を太くし苗質を向上させることや、その後の栽培管理を適切に行うために、部会全体での研修会の実施や栽培経験の浅い生産者の栽培技術の底上げを図りました。

■活動内容

1 生産安定

(1)各展示ほ等の設置による技術改善

苗質向上のため、育苗中の施肥方法や肥料の種類を検討を行いました。また、収量向上を目指すため、定植後の寒冷紗被覆の効果実証試験や厳寒期の草勢維持のため、ジベレリン散布や肥料散布の展示試験などを実施しました。

(2)いちご部会栽培研修会の開催

部会全体の栽培技術向上を目的に栽培研修会を開催し、育苗時の施肥試験の結果や定植後の寒冷紗被覆、ジベレリン処理、炭酸ガス施用や温度管理の実態調査の結果などを報告し、現状の問題点や改善方法を周知しました。



いちご研究会の様子

2 担い手強化

全部会員を対象としたいちご研究会とは別に、栽培経験の浅い生産者を対象に、栽培技術の早期習得を図るため、栽培管理作業の目的や効果、そのとらえ方など、作業の意味を理解することを重点とした、いちご研究会を開催しました。

■主な成果

1 生産安定

育苗期の施肥体系の見直しにより、約84%の生産者で充実した苗（クラウン径が平均8.5mm以上）を確保できるようになりました。また寒冷紗を導入し、定植後の天候にあわせた栽培管理が行えるようになった生産者が26戸に増えました。

その結果、共販における部会平均収量も平成28年度以前の4か年平均収量の1.2t/10aから平成30年度は1.5t/10aに増加し、安定出荷につながりました。

2 担い手強化

経験の浅い生産者を対象とした研究会を開催したことで、生産者の栽培技術の理解が進み、いちご研究会参加者の共販外出荷を含む平均収量は、2.4t/10aから3.3t/10aに増加しました。

■今後の取組み

今後も産地の安定に向け、天候の変化に対応できる技術支援や人材育成を行っていきます。

（園芸畜産課 野菜係）

イチジク収穫予測による有利販売と産地強化

—販売単価向上に向けた収穫予測情報の提供—

課題化の背景

京築地域の果樹の主要品目であるイチジクは、生産者が高齢化し、収穫期の過大な労働負担のため、栽培面積が減少しています。そこで、JA福岡京築ではイチジクのVF出荷*に取り組み、収穫後の調製作業の軽減を行いました。VF出荷されたイチジクのほとんどは契約販売されるため、一定の決まった量と品質が求められます。このため、収穫予測が重要となることからその精度向上を図り、出荷量の推定と品質の安定化を図りました。

※JA全農ふくれんVF課がバックセンターを通して行う出荷販売

活動内容

1 収穫予測の精度向上

イチジクの収穫ピーク期の把握は販売上重要ですが、ピーク期は毎年変動します。このピーク期を明らかにできる時期別収穫量予測法は、着果日から一定の積算気温で収穫期となることを利用しており、定期的な果径調査により時期別収穫量を予測します。「蓬莱柿」は当管内でしか生産されておらず、収穫予測の技術が確立できていない中、普及指導センターではこれに国内で唯一取り組み、平成28年の予測開始当初の6園地だった調査を精度向上のために令和元年には10園地まで増やしました。

2 VF出荷における販売単価の向上

従来の個別選果、共同販売では近隣市場出荷のため、完熟果実を出荷していましたが、VF出荷では、東北や北海道の遠距離市場へ出荷するため、高い日持ち性が求められます。このため、完熟前収穫や低温予冷庫の活用を進めるとともに、VF課との出荷目合わせ会を天候等に合わせて適宜開催しました。



「蓬莱柿」の果径調査



「蓬莱柿」の時期別収穫量予測

主な成果

1 収穫予測の精度向上

イチジクの時期別収穫量予測を継続して実践しており、調査園地を増やすことで予測精度を向上させ、規格別の出荷量や出荷時期の情報をJAや市場関係者へ提供でき、高く評価されました。

2 VF出荷における販売単価の向上

H28年：581円/kg (540円/kg)、R1年：766円/kg (623円/kg)、H28年の基準年に比べて価格が高値で維持できています。※()内は個選共販単価

今後の取組み

今後も収穫予測の精度向上に取り組み、有利販売に向けた情報を提供していきます。
(園芸畜産課 果樹係)

ケイトウの産地拡大とホオズキの安定生産技術の確立

—特産露地切り花産地の強化—

■課題化の背景

京築地域では、ケイトウ及びホオズキが県内一の産地となっています。

ケイトウは、出荷量を増やして欲しいとの市場のニーズが大きく、作付推進による産地拡大の取り組み等を行いました。一方、ホオズキは、年々出荷量が減少傾向にあり、産地規模維持が急務となっていました。そこで、栽培適地である中山間地域以外の平坦地にも作付推進を図りました。この中で、平坦地でも品質の高いホオズキ生産を可能にするため、課題となる実の着色向上対策等の安定生産技術の確立に取り組みました。

■活動内容

1 ケイトウ産地の規模拡大

野菜講習会、各JA支店でのポスター掲示などによる作付推進を行うとともに、新規栽培者へは重点的な巡回指導を行いました。併せて単収向上を図るため、育苗期の施肥改善等の実証ほを設置しました。

2 ホオズキ安定生産技術の確立

平坦地での着色向上を図るため、エスレル（着色を促進する植物ホルモン剤）散布前の灌水処理の実証ほを設置しました。また、白絹病に対する土壌消毒の効果を確認し、現地検討会等で導入を推進しました。

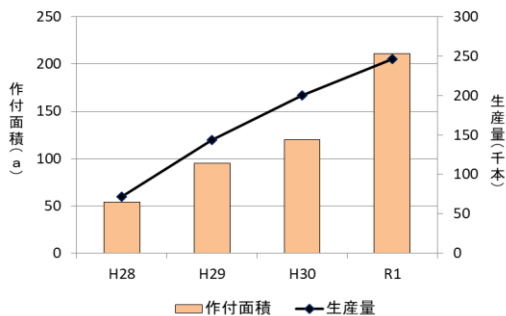
■主な成果

1 ケイトウ産地の規模拡大

冬春野菜等との組合せ品目としてケイトウの導入が進み、平成28年度に54aであった面積が、令和元年度には211aまでに増加しました。また、育苗期の施肥や栽植密度の改善による単収向上効果を実証し、技術導入することとしました。

2 ホオズキ安定生産技術の確立

エスレル散布前の灌水処理による実の着色向上効果を実証しました。また、白絹病対策として土壌消毒の導入が進みました。



ケイトウ作付面積と生産量の推移



白絹病対策として導入が進む土壌消毒

■今後の取組み

面積が増加したケイトウは、さらに単収向上を図り、儲かるケイトウづくりを進めていきます。またホオズキは、白絹病対策や着色向上対策を図りながら平坦地を含め、作付けを推進し、産地の維持を図っていきます。

(園芸畜産課 花き畜産係)

酪農経営安定に向けて

—繁殖改善と後継牛確保による経営強化—

課題化の背景

酪農は京築地域の主要な畜産業であり、後継者のいる生産者が多い重要な品目です。しかし、近年の夏季の厳しい暑熱による繁殖成績の低下や、和牛、交雑種の優先生産による自家産の後継牛の減少が見られ、生産基盤である飼養頭数の維持が課題となっていました。

そこで、関係機関と酪農家毎の課題を洗い出した上で共有し、繁殖管理の改善と後継牛確保の取り組みを推進することで、経営安定を目指しました。

活動内容

1 繁殖管理の改善

飯塚地区乳牛診療人工授精所と協力して、定期的な繁殖検診を実施し、併せてボディ・コンディション・スコア（体型の目安）や乾乳期の飼養管理の改善支援を行いました。また、暑熱対策として夏季の牛体への送風実態調査を行いました。

2 後継牛の確保

生産者と後継牛確保頭数の目標を設定し、交配計画の作成支援を行いました。



繁殖検診の様子

主な成果

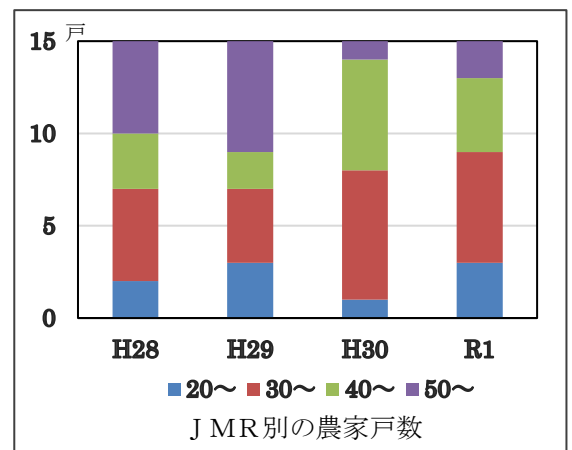
1 繁殖管理の改善

定期的な繁殖検診による治療や確実な人工授精の実施により、JMR^{*}は50未満の農家戸数が平成28年度10戸から令和元年度に13戸へ増加し、繁殖改善につながりました。また、送風実態調査により、牛の繋ぎ換えや送風機の調整等による改善への取り組みにつながりました。

※出荷牛群の受胎の遅れを示す数値

2 後継牛の確保

目標頭数確保に向けた交配計画の実行により、平成28年度に152頭であった後継牛頭数は令和元年度には178頭に増加し、生乳生産の基盤安定へつなげることができました。



今後の取組み

酪農家の経営強化に向けて、後継者がいる生産者を対象に長期的な経営計画の作成及び計画に沿った取組への継続的な支援を行っていきます。

(園芸畜産課 花き畜産係)

京築農業者の経営改善をサポート！

京築地域の農業経営者の経営改善を支援するため、水田農業や野菜、果樹、花き・畜産と農業経営担当の普及指導員がチームを組んで取り組んでいます。具体的には、対象農家と年間の収支を品目ごとに分析を進め、今後の経営改善方針などの決定及び実施を進めています。

また、本年度からJA福岡京築の地域農業の担い手に出向く担当者(TAC:Team for Agricultural Coordination)と連携し、より多面的な支援を行いました。

さらに、農業経営者向けにマーケティングや段取り、雇用、ワークライフバランスなどの研修会を実施し、農業経営に必要なキャリアプランの構築を図りました。



TAC担当者とともに経営改善相談



第三者継承研修会で講師に質問する農家

中山間地域での経営確立、キクイモに活路！

中山間地域は未整備田や鳥獣被害が多いなど農業環境が厳しく、振興の起爆剤となる品目の選定に苦慮していました。そのような中、築上町で昔から少量栽培されていたキクイモの機能性に着目し、地域おこしの特産品として、町、直売所などの関係機関と連携して生産者組織「築上町きくいもクラブ」を設立し、販路開拓や栽培技術の向上などの支援を行ってきました。

さらに、キクイモの生産、流通で最も労働力がかかる洗浄と調製の共同化を提案した結果、JA福岡京築城井支所の跡地を改装し、キクイモ出荷調製施設が設置されました。

これらの取り組みにより、生産者はキクイモを大規模に生産することができるようになり、町内の栽培面積は7haと日本一の産地にまで拡大しました。また、綺麗に洗浄された良質なキクイモ・加工品は、他の産地との明確な品質差を生み、キクイモが農家の経営の柱となりうる品目にまで成長しました。



キクイモ出荷調製施設でのキクイモの洗浄



キクイモの加工品

2 管内の動き(トピックス)

(農)上田宮農組合が県GAP認証を取得

GAP (Good Agricultural Practice : 農業生産工程管理) とは、農業生産において、農産物安全・環境保全・労働安全を確保し、持続可能な農業生産を行うための取り組みのことです。

このGAPを実践していることを第三者が認証する制度が設けられており、京築地域でもこれらの認証を取得する生産者が増えています。

本年度は、みやこ町の(農)上田宮農組合が、県内の集落営農組織としては初の県GAP認証(品目:米)を取得しました。

今後も、GAPの推進、認証取得及び実践を支援していきます。



(農)上田宮農組合への県GAP認証審査の様子

スマート農業に関する研修会を開催

少子高齢化による農業従事者の減少や農業経営の大規模化が進む中、労働力不足を補い、生産性を向上させることを目的として、スマート農業と呼ばれるロボットやICT*などの先端技術を活用した農業が注目されています。

京築大規模土地利用型農業研究会や豊築地域集落営農組織連絡協議会の活動の中で、水田農業におけるスマート農業に関する研修会を開催しました。各会員は、農機メーカーからGPS装着トラクターやドローンなどの先端農業機械を導入した経営について説明を受けたり、自動運転の農業機械の実演を見たり、熱心に情報収集していました。

今後も、研究開発が進み、水田農業や園芸で普及していくことが期待されるスマート農業について、情報提供や導入支援を進めていきます。

※情報通信技術のことで、農業ではデータを活用した管理、農業機械の自動運転等を行います。



自動航行ドローンの実演



ICTを利用した田植機(左)とトラクター(右)

拡大中の夏秋なす！令和元年度は新規生産者7戸加入

京築地域の夏秋なすは生産者の減少が続いていましたが、近年の単価上昇をメリットに掲げ、平成30年度から新規生産者の確保に向けて作付け推進を行ってきました。兼業農家や定年帰農者（予定者含む）、JA農業塾生を対象に、現地視察や説明会を実施したところ、今年度は7戸新規生産者を確保することができました。

また、新規生産者には、早期の技術習得や安定した生産が求められることから現地指導会を実施し、熟練農家のノウハウを継承するための機会を設けました。熟練農家がほ場で実際に具体的な作業についてアドバイスすることで、新規生産者が作業イメージをもって栽培を始めることが出来ました。さらに、生産者同士の繋がりも強化され、情報交換や生産意識の向上にもつながりました。

今後も、生産者の生産意欲向上、新規生産者の確保、生産安定に向けた取り組みを行っていきます。



現地指導会の様子（畝立て・マルチ被覆）

「レタス部会の今後を考える会」を発足！部会の絆を強固に！

JA福岡京築レタス部会(47ha、43戸)では、玉レタスを中心に10月から4月にかけて出荷を行っています。また、大規模生産者を中心に契約出荷に取り組んでいます。しかし、生産者の高齢化が進んでおり、産地の将来像について不安視する声があがっていました。

そこで、普及指導センターが産地分析とアンケート調査を行ったところ、労働力不足や品目の転換等により、5年後、部会が急速に縮小していくことが判りました。この結果を受け、産地の維持のために部会として取るべき行動を明確にすることが急務であるため、「レタス部会の今後を考える会」を発足させ、産地戦略の作成に取り組むこととなりました。

「レタス部会の今後を考える会」では、多様な意見を得るため、部会から役員+若手+女性の16名を参集し、SWOT分析*を行いました。この結果をもとに今後の部会での取組についてアイデアを出し合い、参加者の関心が高かった項目を中心に具体的な活動について検討しました。これまでの検討経過を出荷協議会で報告し、部会で意識の共有を図りました。今後、活動内容や優先順位と役割分担の協議を進め、具体的な活動の実践を支援します。 ※外部環境や内部環境の分析を統合的に行い、戦略を立てる手法



「レタス部会の今後を考える会」の活動風景

2 管内の動き(トピックス)

授粉用花粉の域内流通によるキウイフルーツ「甘うい」の産地拡大

京築地域は、平成 28 年 2 月から福岡県育成の新品種、「甘うい」の苗木の植え付けを開始したキウイフルーツの新興産地です。キウイフルーツの高品質安定生産には人工授粉が欠かせませんが、「甘うい」の開花期は雄品種よりも早く、前年の花粉を使う必要があります。当地域はかいよう病の未発生地域であるため、かいよう病汚染の心配がない花粉を確保するための自家採取が必要ですが、花粉採集は小規模生産者には労力的負担が大きく、花粉の購入希望が多いのが実情です。そこで部会では、授粉用花粉確保に向けて、雄の成木を所有し、授粉用花粉に余裕のある生産者 5 戸から雄花の提供を受け、部会での花粉採集に取り組みました。

花粉採集の際には、普及指導員調査研究の成果である『「甘うい」マニュアル補足(京築版)』に詳しいノウハウを記載しており、初めての方にもわかりやすいと好評でした。今年度、部会で集めた花粉は来年度の必要量を確保できました。今後も県内一の「甘うい」産地に向けて支援を続けていきます。



部会で取り組む花粉採集

渋柿「川底」の加工において農福連携に取り組む

「川底」は、豊築地区を中心に 400 年以上前より栽培されている渋柿であり、特に干し柿は非常に甘く地域住民に愛されている特産品です。昨年は販路拡大を目的として、福岡市のデパートで試験販売を実施し、都市部でも需要があることが分かりました。しかし、「川底」の干し柿加工時期はカキの他品種の収穫時期と重なることから、生産者だけの加工量は限られていたことが課題でした。

そこで、干し柿加工の中で最も手間がかかる皮むきについて、管内の福祉施設と連携して取り組みました。作業者は慣れない作業で始めこそ手間取ったものの、生産者らが皮むきのコツ等を指導した後は、熟練生産者と遜色ない早さで剥くことが出来ました。その結果、干し柿の加工量は昨年と比較して約 6 倍となりました。

今後も干し柿などの加工品生産を支援し、地域特産品の定着と拡大を図っていきます。



福祉施設作業者の皮むきの様子



干し柿加工の様子

キクの重要害虫「クロゲハナアザミウマ」の対策が進む！

京築地域のキクは中山間地域の露地を中心に7～11月にかけて栽培が行われています。夏季の夜温が冷涼なため、花色や葉色が良く、夏場の産地として地元市場や直売所で高い評価を得ています。

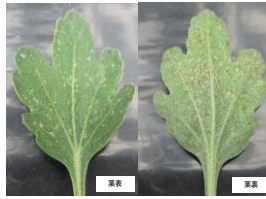
しかし近年、県下でクロゲハナアザミウマの被害が増加し、当地域においても品質低下の要因になっていました。クロゲハナアザミウマの被害はハダニ被害と類似しており、判断が付きにくいことが、被害の拡大を招いていました。

そこで普及指導センターでは、パンフレットを作成し、現地検討会等を通じて被害の見分け方や防除のポイントについて説明を行い、対策の徹底を図ってきました。これまで、ハダニ被害と誤認していた農家も多く、改めて本害虫の被害として認識が深まりました。

今後も引き続きクロゲハナアザミウマの防除対策の徹底を図り、キク生産者の高品質安定生産に向けて支援していきます。

「クロゲハナアザミウマ」対策について

キクに新しいアザミウマが発生しています。
発生に注意し、適切な防除を実施しましょう！



口絵② 被害が進んだ葉

クロゲハナアザミウマの特徴

- ・体長は雌成虫で約1.2mm。体色は全体に黄色であるが、一部胸部に褐色の斑がある。
- ・成・幼虫がキク科植物の葉と花を加害し、主に下葉の葉裏への寄生が多い。
- ・露地では4～10月頃まで発生が見られるが、4～6月の発生が多い。施設では冬季にも発生する。
- ・25℃における雌成虫の平均寿命は約16日、平均生殖産卵数は約40卵。35℃以上では発育できない。



被害の症状

- ・下葉から被害が発生し、主に葉裏にかすり(シルベリング)症状が発生。被害が拡大すると葉は枯死する。花に寄生すると色褪けを起す。(口絵①、②)
- ・ハダニ類の被害と似ているが、クロゲハナアザミウマは葉裏にかすり状の加害跡の他に排泄物の黒い点があるのが特徴。
- ・葉裏の症状は、ハダニ類の被害が葉全体の葉色が暗くなるのに対し、クロゲハナアザミウマは白い斑点の加害跡が見られる。

防除対策は

- ハダニ類の被害と似ているので間違わないように注意する。
- 葉数の少ない生育初期に重点的に薬剤防除を行う。
- 葉裏への寄生が多いので葉裏が葉裏によく付着するよう薬剤散布する。
- 発生は長期にわたるので定期的に薬剤防除を行う。

対策パンフレット

築上町の「堤 功」氏、紫白綬有功章を受章

築上町の堤氏が、秋篠宮殿下が総帥を務められる社団法人大日本農会※より令和元年11月21日に紫白綬有功章を授与されました。今回授与された紫白綬有功章は、前回受章した緑白綬有功章から現役で10年以上活躍している方が対象で全国で3名が受章され、福岡県では昨年に続く受章であり、令和初の受章者となりました。

堤氏は築上町で、レタス、スイートコーン、水稲を栽培する土地利用型複合経営を行っています。経営の安定を図るため、規模拡大に合わせ雇用を導入するなど、経営改善を行いながら産地の維持に貢献してきました。

さらに、長年にわたり地域の農業関係の役員を務めてきたことに加え、地域や県農業大学校等への協力などの中で、農業を営んでいくためには、「仲間」や「地縁」といった人間関係の構築が重要であることを説き、地域内外の後進の育成に努めたことが、高く評価されました。



服部副知事への受章報告

※明治14年に発会したもので、日本の農業の改良や発展に寄与した方を表彰する事業を行う。

3 普及指導員調査研究結果の概要

課題名	結果の概要	部門	担当者
渋柿「川底」の干し柿加工がカキ経営に及ぼす影響について	カキ「富有」及び脱渋の「川底」などの青果中心の経営に「川底」を活用した干し柿生産販売を導入することにより、より高い収益を得ることができる。 また、その際の適切な経営モデルを示した。	地域	手嶋
直売所で新規振興品目が定着する理由について	直売所で振興する新規品目に農家が行き組んだ理由を調査した。 農家が行き組んだ理由は、新規振興品目の作付け時期に「農地」や「労働力」に「余裕」があり、「技術的に不安がなく」、「直売所の説明に納得したこと」であった。	農業経営	清田
産地育成における共同集出荷・加工施設導入の有効性について	個人出荷と共販体制による産地化のそれぞれの収益について比較し、共販体制による産地化が農家に及ぼす経営改善の効果を分析した。 共販体制による産地化することで販売単価は下がるものの、労働力の減少や需要量の拡大により、総売り上げ及び所得は増加することが判明した。	農業経営	瓜生
果樹産地の維持に向けた作業受託組織の体制の改善について	新田原果樹部会サポート部の業務の現状把握を行い、部員の作業技術の強化を図ることで、サポート部が今後業務を円滑に進めていくための方策について検討した。サポート部の月ごとの作業内容および労働時間を把握し、最適な作業モデルを示した。部員が剪定作業時にこころがけていることが判明した。	農業経営	谷口
大豆の収量向上に向けたアサガオ類の除草体系の検討	大豆低収の主要因となっている難防除雑草のアサガオ類の除草体系の検討を行った結果、以下の体系が最も除草効果が高かった。 ○初期除草剤（フルミオWDG加用） → 中期除草剤（播種7日後前後：パワーガイザー液剤） → うね間散布（9月上旬：バスタ液剤）	水田	大森
飼料用米「夢あおば」の倒伏対策等の検討	栽植密度を減らすことで、倒伏を軽減できる可能性が示唆された。 また、基肥一発肥料の場合、倒伏も抑えられ、現在より施肥量を20%～50%減らしても、収量差はほとんどなく、収益性（肥料費が低い）が高いと判断された。	水田	太田
集落営農組織の永続的運営に向けた「集落ビジョン」作成方法の検討	ヒト、モノ、カネに関する現状を一覧表で見える化することで危機感を共有でき、課題の掘り起こしや課題の優先順位決めなどの議論が進みやすくなることが分かった。なお、ビジョン作成時には、なるべく多くの人を関わらせて協議することや、普及指導センター等関係機関が適度の議論の進行を助けることが効果的であると考えられる。 次世代の役員育成には、業務分担による代表理事の負担軽減や、世代別意見交換会による集落内の若手の意見掘り起こしが有効であると思われた。	水田	福山
農福連携の実態調査	管内の農福連携の優良事例である社会福祉法人「敬愛会」、農業生産法人「瑞穂」の実態調査を行った。敬愛会が瑞穂を立ち上げ、瑞穂が生産する農産物の管理作業を敬愛会に委託するかたちとなっている。農作業を敬愛会が受ける際に、農作業や障がい者に詳しく、障がい者が可能な作業分類や障がい程度に合った作業の振り分け等を行う人材が重要であることが判明した。	野菜	川原
いちご「あまおう」における多芽発生防止のための施肥体系と育苗培土の検討	施肥体系ではロングを用いることで省力化及び安定的な育苗が可能である。 また、育苗培土は「与作」を使用している生産者の多芽発生が低かったが、ほかの培土は大きな差は認められなかった。	野菜	濱野 竹本

課題名	結果の概要	部門	担当者
夏秋なす労働時間の実態調査	個人選果の場合、総労働時間の3割は選果調整作業が占めていた。パッケージセンターを利用することで、選果調整作業が省力化され、総労働時間も4～5割に抑えられる。高収量を確保することで、収益性も上がることが示された。	野菜	山内
キウイフルーツ「甘うい」の環状剥皮処理による果実品質向上効果の解明	キウイフルーツ「甘うい」の環状剥皮処理は、果実重、果実糖度、果肉色には有意差が認められず、果実硬度は、主枝の処理と無処理および側枝の処理と無処理の間に差は見られなかった。環状剥皮処理は処理時期が異なる他の試験事例では効果が見られることから、今後は処理時期を変えて検討する必要がある。	果樹	姫野
葉柄中硝酸イオン濃度による簡易測定方法の検討	キウイフルーツ「甘うい」において、機械を用いた簡易かつ迅速に測定できる葉柄中の硝酸体窒素濃度と葉色及び果実品質の間にゆるやかな相関が見られた。硝酸体窒素濃度や葉色を調査することで、果実品質をおおまかに予想することが可能であると考えられた。	果樹	高原
シンテッポウユリの8月出荷における着蕾数予測に関する研究	シンテッポウユリ「西尾3号」の8月上旬出荷における発蕾直前（7月上旬）の茎径と着蕾数の間にはゆるやかな相関が見られ、茎径を調査することによって着蕾数を予測することが可能であると考えられた。	花き	阿波
ケイトウの適正な栽植密度による品質向上	栽植密度を慣行区よりも低くした試験区において、品質が高まり、共販出荷率が向上し、1 a当たりの販売額も増加した。栽植密度を低くすることにより、慣行区と比べ、十分に光合成が行われ、品質が良くなり、共販出荷率が向上したと考えられた。	花き	堂脇
暑熱期における牛体への送風実態調査	牛体への風速が2 m以上あった牛床は農家によって0～75%であり、送風が十分な農家では送風機が3頭当たり1台以上設置されていた。また、暑熱期における標準乳量は送風が不十分である農家で低下する傾向にあった。	畜産	福原

品目	課題名	結果の概要	設置場所
水稲	夢つくし種子の充実向上	施肥量に関しては、基肥を減肥しても茎数、穂数は確保でき、また種子の安定収量及び充実向上のためには、生育状況に合わせて一発肥料の場合を含め穂肥は施用した方が良い。	豊前市
大豆	大豆の難防除雑草対策試験	ホオズキ類・アサガオ類・ツユクサ類の難防除雑草が蔓延するほ場での雑草防除体系を検討したところ、初期除草剤に「フルミオWDG」を加用する事で、いずれも発生は抑制され、特に、ホオズキ類の残存は皆無となった。 アサガオ類・ツユクサ類については、播種後、残存した雑草の防除が必要で、アサガオ類は、播種7日後前後の初期に「パワーガイザー液剤」を散布、ツユクサ類は播種20日後前後の中期に「大豆バサグラン液剤」を散布、これでも残存した場合は、いずれも9月上旬頃に「バスタ液剤のうね間散布」を行うことで、防除できる。	行橋市 みやこ町 築上町
スイートコーン	優良品種の検討（わくわくコーン88）	6月中下旬収穫の作型で優良品種を検討した。「わくわくコーン88」が慣行品種の「恵味スター」と比較して、収量・糖度ともに高く、有望であった。令和2年度から導入し、作付け拡大を行う。	行橋市 豊前市 みやこ町 上毛町 築上町
夏秋なす	天敵スワルスキーカブリダニを用いたチャノホコリダニ対策	天敵放飼後1か月間、なす上で天敵が定着していることが確認された。チャノホコリダニによる被害は、なす1株あたり2箇所程度（茎やヘタ）に抑えられ、果実への被害はほとんど確認されなかった。天敵放飼後の防除には、天敵にやさしい農薬を優先して選択することで、化学農薬と天敵を使った、より効率的な防除が可能であることが示された。	築上町
イチジク	地下水位上昇が「蓬莱柿」の新梢長に及ぼす影響	水田転換園のイチジク「蓬莱柿」においては、排水不良による樹勢低下が問題となっているため、地下水位が新梢長に及ぼす影響について調査した。その結果、地下水位が高い排水不良園では、新梢長が短く、生育が劣った。対策としては、明渠を整備して、園内に溜まった水を速やかに排水する必要がある。	行橋市
カキ	「川底」の干し柿生産に適した生果貯蔵期間について	青果を柿脱渋用ビニール袋で冷蔵すると、収穫約45日後まではヘタをつけたままでも干し柿加工が可能である。ヘタを除去して貯蔵すれば収穫75日後まで干し柿加工が可能であるため、冷蔵貯蔵を活用することで、加工期間を延長することが出来る。	上毛町
カキ	「秋王」のポットによる大苗育苗の検討	植え傷みの少ないポットで大苗育苗することで、本ほ育苗と比較して若干新梢長は劣るものの、移植等を省力的に実施できる。	行橋市
ホオズキ	ホオズキ着色向上対策（土壌灌水）	エスレル散布直前に土壌に灌水することで着色が良好となり、特に上位の着果位置で着色が向上した。土壌灌水により、植物体が十分な水分を吸収したことで色素生成が進んだことが要因と考えられる。	築上町
ケイトウ	簡易移植機を活用したケイトウ定植作業省力化の実証	簡易移植機「ひっぱりくん」と育苗容器「チェーンポット」を活用して定植を行うことで、慣行の手作業と比べておよそ1/10の時間で定植が可能であった。また切り花品質については慣行と同等であった。本試験結果より、定植作業が大幅に省力化できることから規模拡大が可能になると考えられる。	築上町
ケイトウ	ケイトウの育苗期における肥培管理技術の向上	育苗期の追肥により根張りや草勢が強い苗となり、定植後の生育が促され品質が高まり、共販出荷率が向上した。今後は、育苗期の追肥を基本技術とし、生産者への周知を図っていく。	みやこ町 築上町 豊前市

令和2年2月末時点

(令和元年度)

表彰事業名・受賞名	受賞者氏名・組織名	市町名
大日本農会農事功績者表彰 紫白綬有功章	堤 功	築上町
福岡県農林水産まつり 農林水産業特別功労者表彰 (農業)	徳永 隆康	築上町
福岡県農林水産まつり 農林水産賞名誉賞 (地域集団)	中岩 嵩	豊前市
福岡県農林水産まつり 農林水産賞優秀賞 (農産)	農事組合法人 国見宮農組合	築上町
福岡県農林水産まつり 農林水産賞優秀賞 (園芸)	赤松 正吉	築上町
福岡県麦作共励会 集団の部 最優秀賞	農事組合法人 東下宮農組合	上毛町
福岡県大豆作経営改善共進会 集団の部 奨励賞	農事組合法人 今井ぎおん宮農組合	行橋市
福岡県農業指導功労者表彰	久松 逸雄	みやこ町

(敬称略)

※平成31年4月から令和2年2月の期間の表彰事業において表彰を受けた個人及び組織

(1) 令和元年の気象及び農業生産の概要

■ 気象概況

12月から2月にかけては非常に気温が高く推移し、統計開始以降も最も高温となった。

3～5月は期間を通して高気圧に覆われる日が多く、天候に恵まれ、気温も高い日が続き、日照時間は過去最も多かった。

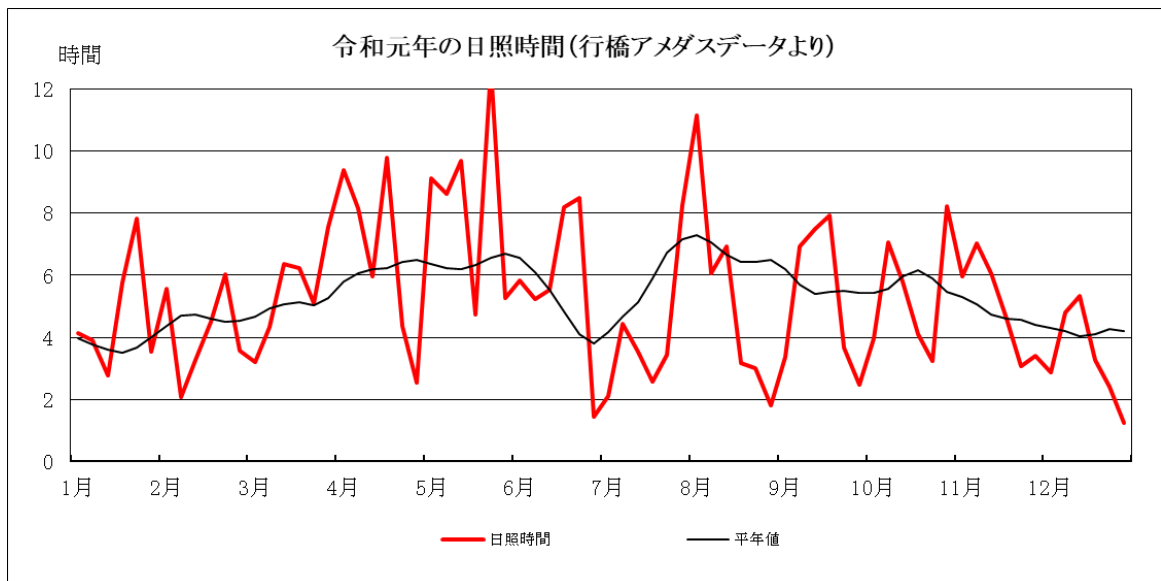
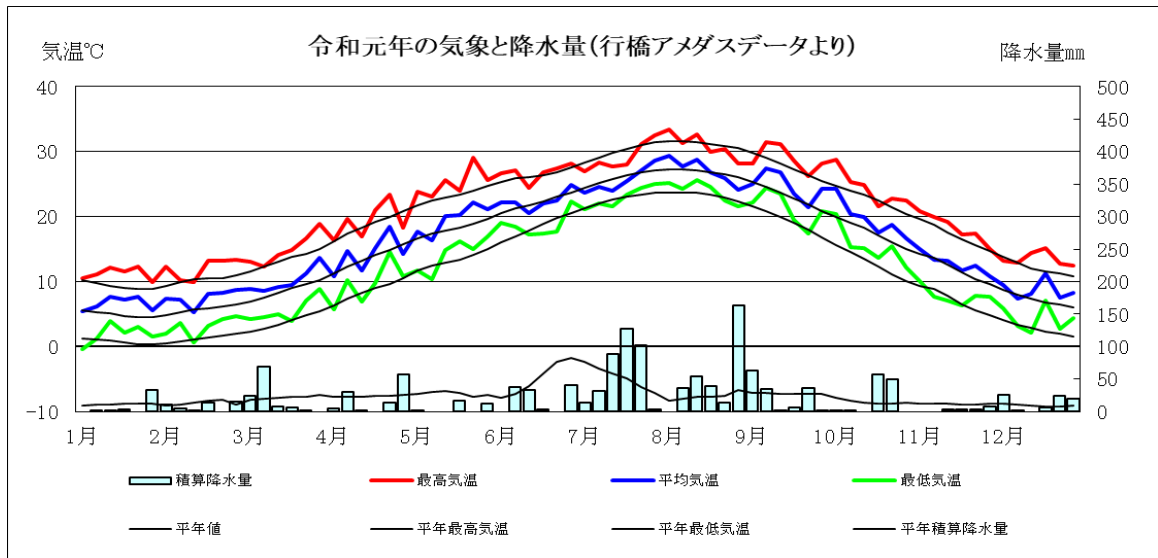
6月は梅雨前線の北上が遅れ、梅雨入りは6月26日ごろで歴代1番遅くなり、降水量はかなり少なく、日照時間はかなり多かった。

一方、7月は梅雨前線が停滞する日が多くなり、降水量が多く、7月18、21日には大雨に見舞われた。このため、日照時間も少なくなった。梅雨明けは7月25日ごろで平年より6日遅かった。

8月に入り、台風8号が8月6日、台風10号が8月15日に来襲した。8月の中旬以降は前線や湿った空気の影響で降水量が多く日照時間が少なくなった。特に8月27、28日は大雨となった。

9月から11月は暖かい空気に覆われたため気温がかなり高く推移したが、この間、台風17号が9月22日に接近し、強風が吹き、大雨となった。

12月は低気圧や前線等の影響を受けやすかったことから降水量や日照時間は少なかった。



■ 主な品目の生産概要

普通作

○ 水稲

早期水稲の移植は5月13日頃がピークとなった。移植後から梅雨入りまで高温・少雨・多日照となり生育は順調であったが、一部地域では用水不足のため生育が抑制された。梅雨入り後は、低温・多雨・寡照となり軟弱徒長気味の生育となったが、出穂は平年並となった。梅雨明け後、気温は高温となったが、多雨・寡照で推移し、成熟期は平年並となったが、登熟期の高温・寡照の影響による登熟不良で収量・品質は低下した。

普通期水稲の移植は6月1日頃がピークとなったが、5月中旬以降まとまった降雨がなく、用水不足により移植が遅延した地域もあった。移植後から梅雨入りまで高温・少雨・多日照となり生育は順調であったが、梅雨入り後は、低温・多雨・寡照となり軟弱徒長気味の生育となり、中干しも不十分となった。梅雨明け後は、高温・多雨・寡照で推移し、出穂はほぼ平年並であったが、8～9月の高温・寡照、9月中旬以降の台風やトビイロウンカ被害の影響も加わり登熟は不良で、成熟期は遅くなり、収量・品質は低下した。

○ 麦（令和元年産）

播種は11月上旬から始まり、その後の降雨が少なかったため、ピークは11月中下旬となった。播種後、冬期は平年に比べ高温で推移し、また、降雨が少なかったため、麦踏み、追肥や土入れなどの中間管理が出来、生育は良好であった。出穂期は平年より1週間程度早く、成熟期も5日程度早かった。登熟期間中も降雨が少なく、根の活力が維持され登熟が良く、収量が多く、品質も良好であった。特に、収量は、大麦・小麦共に前年産の単収を大きく上回った。

○ 大豆

播種は、梅雨明けが遅れた影響で、適期の7月20日までに45%済（昨年は90%）となったが、7月末までにはほぼ終了した。播種後は適度な降雨もあり、出芽・生育は良好で、開花期は平年並となった。しかし、8月は降雨が多く、中耕・培土、除草剤散布等の中間管理が出来なかった。開花後の9月以降は、高温・寡照で推移し、台風による倒伏の発生もあり、後発の雑草の発生も多く、ハスモンヨトウ・カメムシ類の発生・被害は少なかったものの、登熟に悪影響を及ぼし、成熟期は平年並みとなったが、収量は昨年・平年に比べ少なくなった。

野菜

○ イチゴ

親株からのランナー発生は早く始まったが発生本数は少なかった。苗の切り離しは順調に進んだものの、一部で炭そ病や萎黄病が発生した。施肥改善等が進んだことで、多芽の発生は昨年より減少した。9月の定植から年末まで気温は高めに推移し、年内の出荷は増加したが、乾燥したことで、ハダニ類の発生が多く推移した。

○ レタス

8月中旬～9月上旬に降雨が続き、早期作型では定植遅れが発生したが、9月中旬以降は降雨が少なく、定植は順調に進んだ。定植後、気温は高めに推移したため、大玉傾向となり、年内の出荷量は増加した。12月以降も気温が高めに推移したことから、約1～2週間前倒し傾向の出荷となった。病害虫については、ヨトウムシ類や腐敗病、菌核病が発生した。

○ スイートコーン

定植は降雨も少なく、順調に進んだ。1・2型は、3月下旬～5月中旬の高温・乾燥による副房発生や先端不稔が見られた。3型以降は天候に恵まれ大振りな収穫となった。害虫は、アブラムシ類の発生が懸念されたが、適期防除を行い、比較的被害は少なかった。

○ 夏秋なす

梅雨入りが遅く、気温が高めに推移したため、7月の収穫量は例年に比べ多かった。8月中旬以降、台風や長雨の影響で草勢は低下したものの、9月中旬には回復した。総収量は過去5か年の中で最も高かった。8月以降うどんこ病やチャノホコリダニが発生、また、風傷等により秀品率の低下に繋がった。

6 参考資料

果樹

○ イチジク

蓬莱柿の発芽は4月2日で平年より1日程度早く、とよみつひめの発芽は平年並みで4月11日であった。8月後半の長雨日照不足の影響で、着色不良、腐敗、疫病の多発が見られた。

○ モモ

満開期は、前年に比べて0～3日程度早く、開花期間は平年並で、着果も平年並であった。果実肥大は、5～6月の乾燥少雨で早生種ほど小玉傾向となり、晩生種は7月の降雨で回復した。病虫害は、せん孔細菌病が、8月の台風通過後に多発した。

○ キウイフルーツ

満開日は5月8日（前年5月4～5日）で、着果は良好であった。果実肥大は乾燥により初期肥大がやや不良であったが、灌水や摘蕾、早期摘果の実施により回復した。8月下旬の大雨後、根腐病が発生し落葉が生じた。落葉が激しい場合は枯死する樹もみられた。

○ ナシ

満開日は幸水4月10日、豊水4月7日で昨年より5日ほど遅くなった。果実肥大は良好であったが、豊水等で水浸果が発生した。

○ ユズ

本年は裏年となり、昨年と比較して着果量は減少した。適度な降雨に恵まれ、全体的に大玉傾向であった。

○ カキ

花芽は少なかったが、降雨に恵まれ果実肥大は良好であった。秋季の降雨による炭そ病が多発したほか、台風による落果が目立った。

○ 中晩柑

着果量は全体的に少なく、昨年より低糖・高酸傾向となった。

花き

○ ホオズキ

畝間かん水の実施や梅雨時期の降水量増加により、草丈は平年並み～平年以上となった。着色については、摘心（生長点を止める）やエスレル（植物ホルモン剤）の適正散布等により良好だった。病虫害については、斑点細菌病や白絹病は少なかったが、7月の大雨後に軟腐病が増加した他、例年になくカメムシの被害が多かった。

○ キク

7月出荷は生育中の降雨が少なく草丈が短いものが多かった。また発蕾も早かったため、前進出荷となった。8月出荷は草丈がやや低かったものの、旧盆の需要期に出荷が行えた。病虫害については、白さび病の発生は少なかったが、黒斑病や近年問題となっているクロゲハナアザミウマの被害が多かった。

○ ケイトウ

5月下旬～6月上旬の定植後のかん水の徹底により順調に活着・生育し、十分な草丈を確保出来た。病虫害については、一部ほ場でヤガ類の被害が散見された。

○ シンテッポウユリ

昨年度の課題であった育苗が改善され、良質苗の生産が行えた。4月中下旬に定植が行われ、旧盆需要にあわせて7月下旬～8月上旬に出荷を行うことができた。生育期の6月中下旬の少雨により土壌が乾燥し、やや草丈は短かったものの品質は良好であった。

畜産

○ 酪農

管内飼養頭数がやや減少したため、生乳生産量は前年より減産した。

○ 自給飼料

昨年の適期播種によりイタリアンライグラスの収量は十分な量を確保できた。飼料稲は天候に恵まれ収穫は順調に進んだが、ウンカ被害により収量および品質は低下した。

(2) 現地活動情報一覧

NO	情報テーマ	作成月日
1	新たな夏秋なす生産者を確保するため、生産意欲に火をつける！	5月22日
2	JA福岡京築犀川花き部会、キクの共販を開始！	7月11日
3	新田原特産の桃出荷中！	7月25日
4	ケイトウの出荷始まる！	7月26日
5	直売所の安全・安心な農産物の充実を目指して！	7月30日
6	イチジク「蓬莱柿」の収穫予測を実施	7月30日
7	「京築のホオズキ」、出荷最盛	8月9日
8	キウイフルーツ『甘うい』園で夏秋なすの推進	8月16日
9	京築地域の就農を応援します！	8月20日
10	京築特産のいちじく「蓬莱柿」、秋果が出荷中！	8月23日
11	JA福岡京築内の2つのいちご部会統合を支援	8月30日
12	農業の第三者継承について考えてみませんか？	9月12日
13	集落営農組織の将来ビジョン作成を支援	9月13日
14	農業塾の現地講習で、ケイトウ・夏秋ナス農家が塾生を直接指導！	9月17日
15	京築で「人生」探してみませんか？	10月29日
16	集落営農組織のオペレーターの高齢化・なり手不足の解消に向けて	10月30日
17	麦作振興大会で収量向上のコツを講習	11月18日
18	ケイトウ出荷反省会を開催！	11月18日
19	ホオズキ土壌消毒実演会を開催！	11月19日
20	令和初！のいちご出荷が始まりました	11月20日
21	農事組合法人 日吉の郷が設立	12月11日

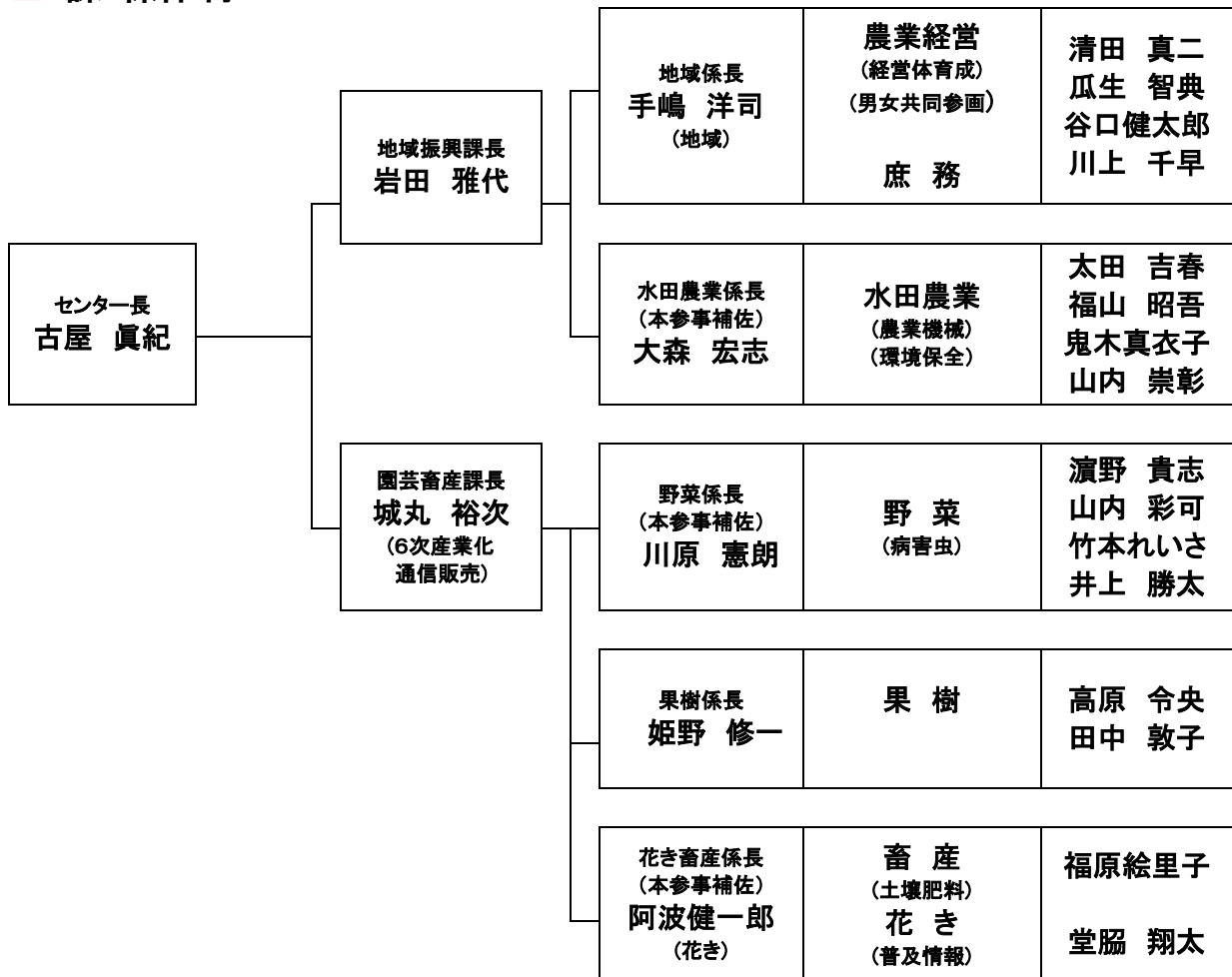
6 参考資料

NO	情報テーマ	作成月日
22	京築地域キウイフルーツ「甘うい」産地拡大決起集会を開催！	12月24日
23	レタス部会の産地戦略作成を支援	12月27日
24	県内のいちご共販単価 No. 1 を目指して	1月27日
25	いちごの苗質向上で12月までの収量23%増加	1月30日
26	J A福岡京築犀川花き部会出荷反省会が開催	2月18日

※閲覧は福岡県ホームページの「普及センター活動情報」を検索☞してください。

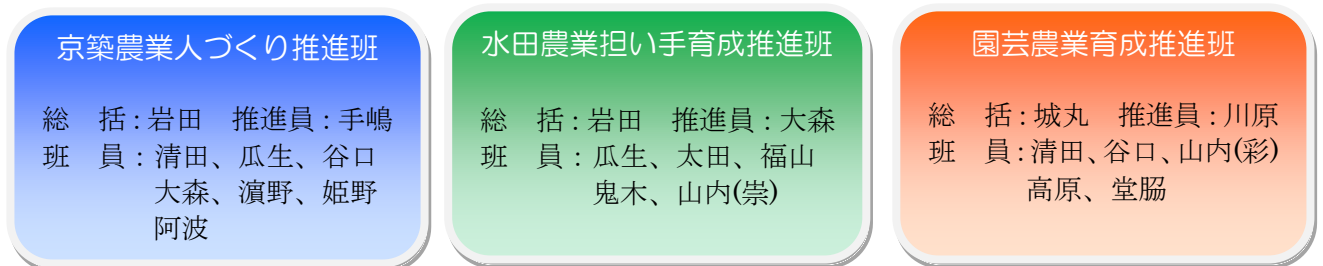
(3) 普及指導センターの活動体制

■ 課・係体制



■ 班活動の体制

○プロジェクト班



○センター内運営事項における推進班



6 参考資料

○市町農振連等担当班

市町名	課長	地域係	各係・部門
行橋市 荏田町 みやこ町 豊前市 吉富町 上毛町 築上町	岩田 城丸 城丸 城丸 岩田 城丸 岩田	谷口 谷口 清田 手嶋 瓜生 手嶋 瓜生	必要に応じ、農振連等の会議へ参加

■ 普及指導センター職員



(濱野) (井上)

清田 高原 瓜生 福山 谷口 山内(崇)

太田 川上 福原 田中 山内(彩) 堂脇 竹本 鬼木

大森 阿波 手嶋 岩田 古屋 城丸 川原 姫野

福岡県行政資料

分類番号 PA	所属コード 4703605
登録年度 31	登録番号 0001



福岡県行橋農林事務所 京築普及指導センター

〒824-0005 福岡県行橋市中央一丁目2番1号

TEL (0930) 23-4215 / FAX (0930) 23-8290

URL <http://www.pref.fukuoka.lg.jp/soshiki/4705401.html>

E-mail keichiku-dlc@pref.fukuoka.lg.jp